

## 1. はじめに

私は教育実習を通して自分が教員という仕事に対してどれほど熱くなれるかを知りたいと考えていた。教員として教壇に立ち、生徒の前に立ったとき自分がどのように感じ、どのように振る舞うのかを知ることができるのは教育実習のそのときしかない。三週間の実習を終えた日に感じたことはこれほどまでに心を動かされ、熱くなれる仕事はないのではないかという実感であった。それをこの報告を通して感じて頂ければと思う。

私立高校で実習をさせて頂いたが、実は私の本来の希望は中学校での実習であった。実習校の事情で高校での実習になったが結果的にほんとうに多くのことを学ばせていただいた実習となった。担当のHRは1学年、授業担当は1学年1クラスと3学年の2クラスを担当した。

また、これから実習へ行かれる方へ向けての意味合いが強いと考え、一人の実習生が実際に経験した出来事、またそこから得た学びを報告したい。

## 2. 生徒の可能性に関して

私が授業を担当したクラスには発達障害を持つ生徒がいた。はじめてクラスに入ったときに感じとり、担任の教諭に確認するとコミュニケーションを取ることに不安を感じる対人関係の発達障害を持っているということであった。私が行いたいと考えていた授業は英語の言語知識の部分よりも、言語運用を重視した授業であった。ペアワークやグループワークを通して、英語を実際に使う状況と同様の状況を授業でも作り出したいと考えていた。つまりコミュニケーションは不可欠であった。そこで教科指導の教諭と相談し、コミュニケーションを重視した授業はやめた方がよいかと尋ねるとその教諭はコミュニケーションの能力は社会にでも必要な能力であり、その生徒にとっても乗り越えなければならない壁であるためチャレンジしてみようと言われ、コミュニケーションを重視した授業を実施した。最初の授業後その生徒は私に「先生はいつまでいるんですか？この地獄が続くと思うともう死にそうです～！」と冗談まじりに言ってきた。しかし、担当教諭との相談の結果であるため、なんとか乗り越えられるようにと思いながら授業を続けた。すると数回授業を重ねる中で、その生徒の周りに座る生徒の行動が変化しだした。弱さを抱えたその生徒を助けようと声をかけ、周りの生徒が積極的に関わろうとしてくれた。その結果、その生徒も授業に参加するようになったのである。それがほんとうにうれしく、私の研究授業はそのクラスの最後の授業で行ったのだが、クラスの担任教諭からはその生徒があのように授業に参加していることに非常に驚いたと言われた程であった。

私が実習において学んだ一つとして、私たち教員側の人間は生徒に対して、これぐらいしかできないだろうという低いレベル設定をしまっているのではないかということであった。生徒にはまだ多くの可能性があり、広がる未知の能力があるにも関わらず、大人の狭い考えの中に閉じ込めてしまっているかもしれないと考えさせられた。その力を引き出すこと、引き出す為の手だてを学ぶ必要があると思わされた。また、生徒のレベルを判断した上でチャレンジさせてみる勇気が必要である。もう一つは実際に現場に

は大学で学んだように発達障害をもつ生徒が多くいる。その対応の仕方も学ぶ必要があると感じた。

### 3. 生徒は教員の生き方、熱量を見ている

高校一年の HR を担当させていただいたのだが、このクラスからたくさんの方のことを教えられた。三週間の実習でクラス担任の出張時などを含めて、HR でかなりの時間を共に過ごした。最初にクラスで挨拶した際に少し軽いイメージを与えてしまったため、はじめの授業はすこしまとまりの無いままに終えてしまった。クラスの状況がもたらしたものではあったがその後も教育実習生という立場もあり、関係が少し近すぎる印象があった。なんとかしなければならぬと思いながら機会を探しているとあるときロングホームルームの一時間を頂いた。何をしてもよいということであったため、自分がなぜ教員になりたいのか、夢について、大学時代に感じてきた多くのこと、ボランティア活動や人との関わりについてなどかなりの熱量で伝えた。それ以外にもことあるたびに本気で関わり、時には感極まり涙を流してしまったこともあった。すると担任の教諭の助けが大いにあったこともあり生徒の私に対する態度がよい距離感へと変化しだした。大学に関しての相談や、友だち関係やクラブでのこと、将来への不安などに関しても相談されるようになり、よい信頼関係が生まれたように思う。

実習の最終日、思いもしないプレゼントをもらった。徹夜で作ったというスクラップブックにメッセージと写真を添えてプレゼントされた。色紙にメッセージなら聞いたことがあったが、ここまでしてもらえとは思ってもいなかったため、本当にうれしかった。

また、担任の教諭や他の教諭の姿は自分にとって、学ぶことが多かった。生徒と関わる際にもどのような関係でいるべきなのかを学ぶことができた。自分も生徒時代そうであったが生徒は教員の姿を見て、人を判断することは明らかであった。

生徒は本気で関わり、伝えたい強い思いがあればそれを感じるし、反応を示してくれる。自分で後ろめたい生き方をしていればそれを生徒は感じるし、尊敬もしなくなる。教師は生徒に恥じない生き方をすべきであるし、一人の大人として生き方を示さなければならないということを教えられた。本気で関わる覚悟があるのかどうか、生徒に対して恥じない教師であるかどうか問われていると感じた。

### 4. これから実習へ行かれる方へ伝えたいこと

私が実習を通して強く感じたこととして、それまでにしてきたことが明らかに影響するということである。自分の科目の知識であったり、人とのコミュニケーションに関してなど、それまでの経験や準備が大きく影響する。私も勉強不足、準備不足を強く感じた。しかし、はっきり言っていくら準備してもこの思いは消えないものだとも言える。なにをすればよいかと悩んでいる間にも頭にはいくつかの選択肢があるはずである。それを一つ一つ積み重ねて実習に臨んで欲しい。準備をしてきたという自信は生徒の前での自分の振る舞いに大きく影響する。それは生徒との関係においても他の教諭との関係においても大きなアドバンテージになるはずである。

また、おそらくほとんどの方が不安を抱えながら実習を迎えることと思うが、実際に

実習に行けば教員の方や他の実習生などたくさんの方が助けてくれることと思う。そのため、何事にも恐れずにチャレンジして欲しいと思う。その姿を見て生徒は「先生！」と大きな声で呼びかけてくれる。

## 5. 最後に

教員という仕事は想像していた以上に魅力のある仕事であった。自分のした仕事で生徒とともに喜び涙することができるということはほんとうに幸せなことであった。そのような仕事他にがあるだろうか。たかだか三週間の実習ではあったが、教員という仕事の魅力を大いに感じる事ができた。まだ、見えない部分がほとんどではあるが今回の実習で感じたことを忘れずに学び続け、将来教壇に立つ際に胸を張れるように準備していきたいと考えている。